

# 鬼と鏡

東京女子高等師範學校教諭兼教授 石井庄司

例の常陸國風土記の久慈郡の條に次のやうな短い記事が見える。原文では僅かに十六字しかないものであるが、眺めて居るに色々事を考へさせてくれる。

まづ本文を掲げてみよう。

東山石鏡。昔有魍魎。萃集翫見鏡。則自去。水府御藏版さいふ江戸時代の版本には、傍訓が施してあつて「東の山にかがみ石あり」と讀むやうである。最近の刊本では各々異つてゐて、大日本文庫の風土記集(植木直一郎博士校訂)並に大倉精神文化研究所の神典には「東の山に石鏡あり」とある。また武田祐吉博士校訂の上代文學集並に岩波文庫の風土記等には「東の山に石の鏡あり」とある。

水府本の頭註には、「鏡石」と文字の順も改めてあつて、その所在を生井澤村とし、石は月鏡石といふものであるとし、其の色は紫黒で潤澤あり、鏡とすることが出来るといふやうな事を述べてゐる。しかし原文には明かに「石鏡」とあるのだから「鏡石」と書き改めることは如何かと思は

れる。且「石の鏡」といふのが最も穩當と思はれる。

要するに此の一節の意味は、東の山に石の鏡がある。昔鬼があつて多勢集つてその鏡を翫見て、そこで自然に何處かへ行つてしまつたといふのである。原文には此の次に割註をして、「俗に曰く疾鬼も鏡にむかへばつひゆ」とある。此の「俗」の意は所謂雅俗の俗ではなく、國風であり、こゝでは諺といふ意味であらう。鬼も鏡にむかふと自滅するといふので、鏡に對して神祕的な力の作用のあることをほのめかしてゐる句である。

魍魎は普通に魍魎罔兩といつて、山林の異氣から生ずる怪物即ち「すだま」或は「木の精」といはれてゐるものである。然し註には「疾鬼」とあるせいか諸本はいづれも「魍魎」を「おに」と訓んでゐる。一體「鬼」とは何であらうか。

出雲國風土記には、目一つの鬼が出てきて、田を耕してゐた男を食つてしまつたといふやうなことが出てゐる。一つ目小僧の類であらうか。日本書紀の欽明天皇紀には、左渡國の北の御名部の崎に肅慎人が漂著して、春夏に魚を捕

へて食物を記したことを記してゐる。そして佐渡國の人が言ふには、あれは人ではない、鬼魅おにであるといつて、敢へて近づく者がなかつたさある。異邦人を以て鬼おにとすることはその後にも見えてゐるさころである。なほ齊明天皇紀には、官中に鬼火が顯れたことを記してゐる。それは朝倉橘

廣庭宮は、朝倉社の木を伐つて造營せられた爲さしてゐる。しかし鬼火おには如何なるものか積極的に見るべくもない。上代文獻に見えてゐる鬼の記事は以上で盡さるのであるが、鬼の事は平安時代には「もののけ」いふ形で物語の中でも重要な役割を果すことになる。桃太郎の鬼が島、大江山の鬼、黒塚の女なご子供等にも親しまれてゐる。鬼はぎんな風貌を備へてゐるものであらうか。支那のものである史記の五弟紀に「魍魎」の註として人面で獸身四足、好んで人を惑はすさ書いてゐる。それに對して佛教でいふさころの夜叉または羅刹は、人の形をして牛の如き角あり虎の如き牙を持ち裸で腰には虎の皮を絡ひ、相貌は獍惡で怪力のある者をいふさこになつてゐる。古今著聞集に「鬼は物いふさこなし。その形、身は八九尺ばかりにて髪は夜叉の如し。身の色赤黒く、眼、圓くして猿の目の如し、皆裸なり、身に毛生ぜず」さ書かれてゐる。

鏡に就いては、畏くも神鏡を始として多くの古傳がある。白銅鏡びやくきやういふやうな語もあつて、主として金屬製のもの

のであるが、此處にあるやうな石鏡もあつたやうである。此の鏡きやうと鬼おにの組合はせに興を引かれて、自分は以下のやうな小話を組立てて見た。幼兒には餘り恐怖心を起させぬやうに、鬼の取扱に就いては注意を要するさこと思ふ。

## 二

むかしむかしあるさころにおぢいさんがありました。おぢいさんは、いつもお馬を引いて山から里へ、里から山へ荷物をはこんでゐました。

ハ―イ、ハ―イミ、おぢいさんが唄をうたひますさ、お馬はヒンヒンミ元氣よく重い荷物を運びました。お馬のからだに附けた鈴はチャラン、チャランミ氣持よく鳴りました。ある日のさこ、おぢいさんがお馬をつれて山の方へ歸つてきました、荷物がいつもより重かつたので、けはしい山を登るのは大變苦しく、だんだんおそくなつてきました。カア、カアミ山では鳥がねぐらに歸つて行きます。お日様はだんだんミ西の山の方に入つて行きます。

「おや、もう日が暮れるぞ」おぢいさんは、びつくりしました。

「お馬、さあ早く歩いておくれよ、お日様があんなさころへ入つて行きましたよ」

さいつて、さんさん歩いて行きました。

するさうしろの方で、オーイ、オーイミ呼ぶ聲がします。

誰だらうと思つて、立ち止まつて見ましたが、そこには誰もいません。そこでまたお馬ご一所に歩き出します。

「オーイ、おちいさん、オーイ、おちいさん」

と呼びました。ふりかへつてみるに、何時の間に、どこから出てきたのか、大きな青鬼がおちいさん目がけて追つかけてきます。これは大變な事になつた。早く逃げろ、逃げろとお馬ご一所に走らうとしますが、荷物が重いので歩くこゝが出来ません。もう今にも追つかれさうです。

さうしたものが考へてゐましたが、「さうだ」とおちいさんは手を打つてよろこびました。お馬に積んでゐる荷物の中から、大きな鏡を取り出しました。青鬼はぎんぎんおちいさん目がけて追つかけてきます。

そこでおちいさんは大きな鏡を兩手に持つて、青鬼の來る方に向けて待つて居ました。鏡は夕日をうけてピカピカと光つてゐます。青鬼は變なものが出てきたと思ひましたが、一呑みに呑んでやらうと進んでまゐりました。見るに、向ふには恐ろしい青鬼が立つてゐるではありませんか。

「誰だ！ そこにゐるのは誰だ！」

と青鬼が大きな聲で言ひました。そこでおちいさんは、鏡を動かし、「ウー」と言ひました。鏡の中に映つてゐる青鬼がうなつたやうに見えたのでせう。

驚いたのは、本當の青鬼です。

「さあ、こゝへ出て來い」と言ひながら、自分も恐ろしいものですから、あべこべにチリチリと一歩づつ後ずさりをしました。するに鏡の中の青鬼もだんだん後へ戻つて行きます。その中にさうさう青鬼はずつと向ふの方へ逃げて行つてしまひました。

おちいさんはお馬ご一所によるこんで山の家へ歸つて行きました。

海軍記念日も近づきました。幼稚園では、海軍記念日だからと言ふでなくても軍艦旗をよく掲げます。子供たちの帽子につけてやることもあれば、胸につけてやることもあり又子供のこしらへた粘土の軍艦、木の軍艦等につけてやることも屢々あります。がさて、その正確な寸法と言ふことになる一寸當惑することがありはしないでせうか。そこで保姆の知識として現行の軍艦旗の規準を左に掲げて見ました。(海軍省海軍軍事普及部發行「軍艦旗制定五十周年に際して」に依る)

地色	紅白
日章及光線	縦ノト二分一
日章中心	旗面ノ中心ヨリ風上ノ方ニ偏スルコト縦ノ六分一
日章徑	縦ノ二分一
日章幅	縦ノ二分一
光線間隔	十一度四分一

